

WELCOME TO KAGAWA-UNIV.

知らない自分を探検する

WELCOME TO
KAGAWA-UNIV.

香川大学



EXPLORE

知らない自分を探検する

2018年、世界にはいまだに多くの謎が満ち、時代や地域の中でさまざまな課題が生まれています。香川大学は、世の中の真理を追究し、複雑な問題を解決するべく行動するために、人や英知が集まる知の拠点になる。そんな思いでこの4月から新学部や新学科がスタートし、今までとは違う香川大学が始まっています。新しい世界に一步を踏み出すことは、今まで知らなかった、新しい自分の才に気づくことにもつながります。今号のかがアドでは、新しい大学の姿と、新しい自分を発見した香大人をご紹介します。

01. 創造工学部

FACULTY OF
ENGINEERING AND DESIGN

世の中に欠けているピースを埋めることが 多くの人に喜ばれるものづくりの出発点。

創造工学部 造形・メディアデザインコース 井藤隆志教授

井藤教授の研究室の一角には、美しくも不思議なものが並べられているコーナーがあります。動物のような動きで転がる木のオブジェ、アクリルが美しいライト、野菜が入ったプラスチックケース…。世界中の人に使われているこれらのものを作ってきたのが、創造工学部の井藤隆志教授です。教授の経歴はユニーク。プロダクトデザイナーとして情報機器メーカーで活躍したのち、イタリア・ミラノでデザイン事務所を設立。「イタリアの企業はほとんどが従業員20名以下の中小企業。本質的な価値の提供を大切にしている企業をクライアントに持ち、デザイン、モノづくり、経営をみっちり学びました」と話します。



帰国後は故郷の岐阜県でデザイン事務所を立ち上げ、大同大学の教授にも就任。地域の産業にデザインの力を掛け合わせて、機能的で美しいものを世の中に送り出し、またその手法を大学生たちに教えてきました。井藤教授が手掛け、今年発売された高齢者向け電動車いす「SCOO」を例に、教



授のものづくりを見てみましょう。「世にある電動車いすを見た時に、“人間がモノとして乗らされている”という感じを受けました。自由にどこにでも行きたいという人間の自然な気持ちに、車いすがフィットしていない気がしました。同じような問題意識を持つメーカーの経営陣やエンジニアを巻き込んで“第二の足になる車いす”を作ろうとプロジェクトをスタートしました」。車いすに目が行かず、乗っている人そのものが自然に動いているように見えるデザインは、「使う人を中心に考える」という井藤教授とそのチームの考えを反映させています。自分の作ったものが、デザインに高感度な人だけに受け入れられるのではなく、「隣に住んでいる人が当たり前のように使っているものであってほしい」と

いう井藤教授。教授の作品は国内外のデザインの賞を数多く受賞していますが、実はコンビニや100円ショップでも手に入るようなものも多数。より多くの人に受け入れられるもの、見た目も機能もよいものが身近にあるという素晴らしさを追求しているのです。

いま井藤教授は「デザイン概論」「平面表現基礎演習」「立体表現基礎演習」の授業を担当しています。学生は2020年の東京オリンピックのトーチを提案するというテーマに取り組みながら、平面や立体の表現方法の基礎を学んでいるそうです。「トーチには機能が必要であると同時に、日本を象徴する意味もあります。デザインには機能のデザインと意味のデザインがあるのですが、創造工学部はその両方を学べる場です」と教授。「いかに視野を広げてアイデア発想ができるかが大事なのですが、その次に、自分が出したアイデアを選ぶ・自分でコンセプトを決めるということも重要です。そこに自分なりの基準があるということが大切なのです」と話します。高校生まではテストの答えはひとつでしたが、現実社会では問題解決の答えは無限にある。今までとは違う「問題」にいきいきと取り組む学生たちを、井藤教授は優しく導いています。



02. FACULTY OF ECONOMICS 経済学部

面白いものは面白い人が集まる場所で生まれる。
人とつながりまちの未来を考える、現場の経済学。

経済学部経済学科 原直行教授

観光を通しての地域活性化は、香川大学の大切な地域貢献のひとつ。経済学部の原直行教授は、グリーンツーリズムやエコツーリズムをはじめ、長年、地域の観光振興全般に携わっています。

原教授は、創造工学部八重樫理人准教授と共同で、観光者に適切な観光情報を提供するシステムの開発を行っています。



特に外国人に関しては、彼らが香川のどこに行き、どこに泊まり、どのように彼らが観光情報を収集しているかというデータが全くない状況で、まずはこういった情報を訪問外国人へのアンケート調査で明らかにすることからスタートです。「先日高松駅で外国人観光客に“地下鉄の駅はどこ?”と聞かれて、高松築港駅のことだと分かったのですが、地元で人気のうどん屋さんに行くのだと聞き、どこでそんな情報を得ているのか、逆になぜ交通機関の情報が知られていないのかと驚きました」と原教授。本システムは、来年の瀬戸内国際芸術祭、さらには2020年のオリンピックを見据えて、開発がすすめられています。

異なる学部の先生が連携し、それぞれの強みを生かして、観光を通じた地域活性化の課題解決に取り組むこの試み。「異なるものが出会うことで、新しいものが生まれる」という原教授が目指すの

は、異分野の融合から生まれる魅力ある地域の姿です。そのため、学生にも多くの人に会う機会を提供しています。「創造工学部の先生に“文系にとっての工業デザイン”を話してもらったり、民間の

IT企業社長を招いて“ICTを用いた観光振興の取り組み”を聞いたたり」。これまでの観光振興に関わる様々な活動を通して、観光やまちづくりに関わる方たちと築いてきた関係があるからこそ、このような機会が提供できるのです。



さまざまな観光地の事例を見てきた原教授は「自然は“戦える”」と強調します。例えば瀬戸内。自然、素朴な暮らし、地元ならではの食…ここにしかないものを磨き上げて、景観を整備し、人を呼び込む。イタリアの田舎で実践されている

ような地域経済が回るしくみを作れるのではないかと話します。「それは、50年後、100年後のまちのあるべき姿を考えることでもあります。即効性を追うだけではない視点が必要ですが、考えるプロセス自体に意味があると思っています」。

最近「地域活性化をやりたい。そのために経営を学びたい」と経済学部に入る学生も増えてきました。現場に出て地域の人と一緒に奮闘し、時には現場でお叱りを受けながら、それでもやりたいことを貫くために周囲を説得し巻き込んでいく学生たちの姿に、教授自身何

度も感銘を受けると言います。「彼らはいま社会人となり、民間や行政の観光・まちづくりの現場で活躍しています」。一緒に仕事をすることも増えたという原教授。また新しい融合が生まれそうな予感です。



03. DEPARTMENT OF CLINICAL PSYCHOLOGY, FACULTY OF MEDICINE 医学部臨床心理学科

石巻市役所での被災者メンタルヘルスを通して 見えないところを支えるための、想像力と創造力。

医学部臨床心理学科 野口修司准教授

2011年に発生した東日本大震災。その直後から被災者の方のカウンセリング等に従事してきたのが、当時、宮城県で心理学の研究を行っていた野口修司准教授でした。震災の翌年から今年の3月末まで専任の臨床心理士として石巻市役所の人事課に籍を置き、震災復興にあたる市職員に心理援助を行ってきました。「被災自治体の職員の方は、自分が被災者であると同時に被災者支援を行う職務にあるため、二重のストレスを抱えています。家族を顧みずに災害対応を行わないといけなかった自分を責める方もいます。長期化する復興業務で心身ともに疲弊しても、周りに迷惑はかけられないから

と我慢している方も少なくないのです」とその状況を話します。

そこで野口准教授は市役所で「いつでも相談できるカウンセリング窓口」を開設。不眠等のストレスを抱える本人のみならず、その上司や同僚といった周囲の人からも幅広く相談を受けていました。「震災で家族が亡くなったのに自分は災害対応をしていたと自責の念をお持ちの方には、自責感を少しでも和らげることを目標に支援をしていました。ぎりぎりまで復興業務を頑張っている方には「これ以上頑張れなんてとても言えないから、あなたの大変さを周囲に伝えて助けを借りませんか？」とお話することもありました」。同時に、心の健康について知ってもらおうと全職員と管理職向けにパンフレットも作成。薄くシンプルなものにし、一度読んだ後は必要な時に思い出してもらおう“お守り”代わりに使ってもらえたらという意図を込めました。

これらの活動を通して、野口准教授は長期的な支援の重要性を感じられたと言います。市職員にとって復興業務は街をゼロどころかマイナスから創り直すという他に前例のない

業務。被災者にとっても復興で住環境が変わるたびに心理的負荷がかかります。状況を知っている心理援助者が長期的に関わるのではないかと。そう考える野口先生は香川大学で教鞭を執る今も、定期的に石巻市役所で心理支援

を続けています。現場を経験されてきた野口准教授に、心理職に求められる資質を尋ねたところ「想像力と創造力ではないでしょうか」という答えが返ってきました。「カウンセリングでクライアントの話を聞いて状況や気持ちに共感するためには想像力が必要ですし、個々の状況が異なる中で、どうすれば今よりも良くなるかを考えるには創造力が必要です」。心理学の中でも臨床心理学は医学と密に関係があると言います。「メンタルヘルスは目に見えないので、自分の状況がどうかを自分では判断しにくい反面、体には不調として現れます。そんな時、医学的な知識を学んだ心理援助者がいると、どのような支援がこの人にとってベストかという選択肢が広がります」。公認心理師という国家資格の誕生で、臨床心理のニーズが社会に広がっていくのではないかと話す野口准教授。臨床と研究の両方を知る立場から、新しい臨床心理学科で、新たな時代の臨床心理の専門家を育てようとしています。





KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

「IAUDアワード2017」金賞を受賞

インクルーシブ教育システム「ともに学ぶプロジェクト」
教育学部 特別支援教育 坂井聡教授・宮崎英一教授

障がいのある人が積極的に参加・貢献できる「共生社会」の形成が、世界的な課題となっています。その実現のためには、児童生徒が障がいの有無に関わらず、同じ場で一緒に学ぶ「インクルーシブ教育」が最も重要です。「ともに学ぶプロジェクト」は、そのような教育を進めるためのシステム構築を目的とした産学官共創の取り組み。一人ひとりの気質に応じた環境を整えるためのICT活用モデル開発を目指して、香川大学と富士通株式会社が共同で開発を進め、香川県教育委員会と小豆島町教育委員会

の協力も得て、特別支援学校など計6校で製作したシステムの実証実験を実施。この取り組みが「IAUDアワード2017」の金賞につながりました。「目が悪い人にめがねやコンタクトレンズがあるように、漢字が書けない人、計算ができない人に支援機器を提供することで、それ以外の能力は充分あるのに、学校や社会に順応できずに、引きこもってしまうのを防ぎます。ICTは、簡便さに加え、先進機器を使用できるかっこよさが、児童たちを惹きつけるんです」と、教育学部の坂井聡教授。坂井教授のアイデアを同学部の宮崎

英一教授がプロトタイプにし、富士通が精度を高めて商品化したのが「きもち日記」です。「すき」「きらい」など、パネル上に表示された12種の感情から、一番近いものを選んでタッチ。感情の表現や伝達が苦手な人が他者とコミュニケーションを図りやすくなったのはもちろん、自己表現ができることで気持ちが落ち着き、学習意欲が高まるなどの成果も表れました。現在のインクルーシブ教育で、産学官共創の取り組みはレアケース。共生社会づくりに欠かせない、ボーダレスな取り組みの先駆けになりました。



KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

平成30年度全国発明表彰 朝日新聞社賞受賞

創造工学部 造形・メディアデザインコース 大場晴夫教授

6月12日に行われた平成30年度全国発明表彰の表彰式。発明協会総裁であられる常陸宮殿下の御前で、大場晴夫教授が他4名とともに朝日新聞社賞を受賞しました。受賞したのは大場教授がソニー株式会社に在職時に発明した「タッチ操作を用いたワイヤレス機器接続方法」。携帯電話の音楽をスピーカーで聴きたいとき、自分の携帯をスピーカーにタッチするだけで音楽が鳴り始めるといった、ID認証の手間がない無線通信接続方式を確立した点、この方式が国際標準化され、誰でも簡単に使える通信方法

が広がったという社会的意義の大きさが、受賞につながりました。「モノそのものではなく、新しいユーザー体験のデザインが評価された点も画期的でした」と大場教授は振り返ります。始まりは2000年、「こんなことができたら面白い」と、PDA*をパソコンにタッチさせるだけで情報の送受信ができるアイデアを考えたこと。「見たみんなが驚きました。アイデアを深め、プロトタイプを作り、周囲を巻き込んで開発を進めました」。写真や音楽、資料などのデータを共有する技術なので「多くのメーカーで同じように接続できないと不便」と

国際標準化も進めます。iPhoneの登場で携帯端末が情報のハブになるという概念が社会に浸透するに従い、この接続方法も広がっていきました。「誰もが見たことも聞いたこともないものをつくるのが発明。始まりはこんなものがあつたら面白い、便利だという、遊びのような発想にある」と大場教授。実は、スマホの向きを変えると画面も縦横に向きが変わる技術も、教授による発明です。思い描く心。周りを巻き込み実現する力。未来の当たり前を考えると、大場教授の話は大きなヒントを与えてくれます。

*携帯情報端末のこと。Personal Digital Assistantの略。



KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

「第25回衛星設計コンテスト アイデア部門」 地球電磁気・地球惑星圏学会賞を受賞

人工衛星開発研究会

2016年4月。工学部に入学した3人の宇宙好きが、人工衛星開発研究会で出会います。材料創造工学科の柳瀬裕太さんと山下日菜子さん、知能機械システム工学科の神村知皓さん。衛星設計コンテストにエントリーし、初めて書いた論文がいきなり最終審査に。「学内に宇宙工学の先生がおらず、1年なので知識も足りませんでした。人工衛星はいろんな技術の集合体。文献をあたり、顧問の石原先生や他の先生方に学び、必死で知識を補いました」と柳瀬さん。しかし最終審査会の結果は奨励賞。「理論の甘さを指摘され、力不足を痛感しました」。悔しさを胸に翌年、柳瀬さんたちが考えたのは、上空400kmの宇宙での大気濃度を測る人工衛星。宇宙に存在する大気の濃度分布は把握が難しく、ロケットや人工衛星の軌道が理論値を外れる一因でもあります。柳瀬さんたちは太陽活動の影響で大気濃度が変わるのではという仮説を立て、裏付けるデータを収集、解析。宇宙工学では常識外の電離真空計を使って大気濃度などの「宇宙天気」を測るという新しさをプラスした「超小型熱圏大気構造解析衛星の提案」で、第25回衛星設計コン

テストのアイデア部門に再挑戦。理論の確かさ、発想の斬新さが高い評価を受け、念願の「地球電磁気・地球惑星圏学会賞」を受賞しました。発表後の懇親会では茨城大学から共同研究を持ちかけられ、彼らの論文は、茨城大生の卒業論文に、感謝の言葉とともに引用されています。2018年は設計部門に応募する柳瀬さんたち。理論や正確さ、斬新さなど要求されるレベルも高くなります。研究会の宇宙好きも19人に増え、1・2年生は先輩に続けとアイデア部門に挑戦。暑い夏が始まっています。

なえどこは、経済学部の学生プロジェクトで、地域のために「何かやりたい」と考えるチームや個人に、「学び合える場」づくりを行っています。その「なえどこ」が、財務省四国財務局の「地方創生支援のための若手プロジェクトチーム」と連携。小豆島の空き家を民泊として再生する提案を行い、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2017」の「大学生以上一般の部」に応募された647件の中から、最高賞を受賞しました。このコンテストは、「地域経済分析システム(RESAS:リーサス)」を

用いて地域の課題を発見・分析し、その上で解決策を提案するものです。「なえどこ」は、小豆島に外国人観光客が急増しているのに、安価に長期滞在できる施設が少ない現状と、4軒に1軒という高い空き家率を、分かりやすくデータ化。空き家の民泊活用への可能性として示しました。解決プロジェクトを、観光スポットや商業施設の多い土庄港から徒歩15分ほどの地域に絞った点や、港付近でプロの業者が受付を一括管理することで不審者の侵入を防ぐスキームが、高く評価されました。その地

域は、海賊から島民を守るために意図的に複雑な路地を張り巡らせた「迷路のまち」と呼ばれる地で、歴史背景も来訪者の旅心をくすぐります。最終審査では300人の聴衆を前にプレゼンテーション。「地元の理解をどう得るのか」など、鋭い質疑応答も行われました。「人生で一番緊張した時間。でも、全力でどうにかやりきりました」と語るチーム「なえどこ」。地方創生担当大臣からは、実現したら「ぜひ行きたい」の言葉も。受賞を受け、民泊実現に向けたプロジェクトが、既に動き出しています。

最高賞の地方創生担当大臣賞を受賞

経済学部 学生プロジェクト「なえどこ」

KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2017」 最高賞の地方創生担当大臣賞を受賞



KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

近ごろ話題の将棋は コミュニケーションにも有効です。

香川大学 将棋部

藤井聡太氏の活躍や、羽生善治氏の国民栄誉賞受賞、AIとの対決に、映画やコミックスの流行など、話題に事欠かない将棋の世界。香川大学にも将棋部があり、6人の女性を含む30人が所属し、各々のペースで腕を磨いています。部活動は、毎週土曜日の13時から17時。幸町キャンパス近くの亀岡町コミュニティセンターなどに集います。部員の半数くらいは、大学に入るまでほとんど将棋を指したことのない初心者です。「興味があればそれで大丈夫。経験は問いません」と、部長の三宅沢河さん

(法学部3年)。経験者が初心者に教えたり、対局や観戦をしたりと、好きなスタイルで部活の時間を過ごします。部活の時間以外でも、部室に数人いると対局が始まり、親睦会の2次会も、カラオケでもラーメンでもなく「シメのひと指し」。また、好きな棋士や戦法について話したり、動画でプロ棋士の対局を観戦したりと、部活仲間が集って日常的に将棋を楽しんでいます。年に2回開かれる中四国学生将棋大会でも善戦。7対7で戦う団体戦は、前回B2級1位となり、今回はB1級で戦います。個人戦には13人が出

場して8人が本戦に進出し、竹本朋樹さん(教育学部3年)はベスト16に。また新人戦の若葉杯では、瀧川準也さん(法学部1年)が優勝に輝いています。部員は、論理的思考が好きで、真面目で「菩薩のように」温厚な人が多いのだそう。戦略を練るのが好きであればスポーツマンの人も、将棋の素質あり。「思考のゲームとして一生続けられ、年齢や性別の区別なく誰とでも盤上でコミュニケーションできるのが将棋の魅力」と部員の皆さんが語る将棋を、気軽に体験してみませんか？



KAGAWA UNIVERSITY'S NOW

1台の自転車で、もっと新しい世界へ。

自転車競技サークル「クロワジュール」

レース出場を通して、自転車を競技として楽しむ「クロワジュール」。クルーズや巡航を表すフランス語を自転車の「巡行」になぞらえて2016年に誕生した新しいサークルは、今年3月、西日本チャレンジレースで部員の5位入賞を叶えました。スポーツとしての自転車の魅力を「頑張った分だけ速くなれる、成長を感じられる」と話すのは、サークルの代表で経済学部3年生の上村周作さん。ロードバイクならではのスピード感、自分の力でどこまでも行ける達成感に魅了されたひとりです。現在の部員は21人。多くはロードバイクの経験者です

が、自転車が好きななら初心者でもすぐに100kmは走れるようになるのだとか。週末に行う活動では目的地までどれだけ早く行けるかを競う部内タイムトライアルを実施したり、月に1度はサイクリングデーと称して小豆島一周や徳島へツアーをしたり。9月にはしまなみ海道を舞台に2泊3日の合宿をするなど、さまざまなことに挑戦しています。「すべてトレーニングの一環ですが、ひとりではつらいと感じてしまうことでも、仲間と一緒に走ることで楽しんで乗りこえられます」。旅にはパンク、体調不良、道に迷うなどトラブルがつきもの。仲間ですら

たびに結束も強まります。トレーニングを積むといよいよ自転車レースへ！自転車競技の幅は広く、自分に合うレースを見つけて出場します。レースでは勝つのはひとりですが、そのひとりを勝たせるために団体に動くこともあるのだとか。気づいたら自転車の話ばかりしているというクロワジュールの部員たち。上村さんは代表として、自転車競技という他にはない楽しみを追求する一方で、部員が勉強やバイトなど大学生活も存分に楽しめるよう心を配ります。自転車とクロワジュールを愛する上村さんは巡航する部員たちをいつも温かく包んでいます。

FABRIC TOKYOがめざすのは オープンなものづくり。 ものづくりの背景や、つくるひと、生産工程 そのすべてを見せて、 納得感のある服をつくる。

自分の体のサイズを採寸してクラウド上に登録する。すると、自分の体にぴったりのビジネススーツやシャツを、いつでもネットでオーダーできる。FABRIC TOKYOは、ITとファッションを組み合わせて新しいカスタムオーダーを提案するスーツブランド。こだわりの生地は200種以上から、パターンは40型から選べる便利さと誠実なものづくりで、ミレニアル世代を中心に支持を集めています。創業者の森雄一郎さんは、香川大学工学部の卒業生。いま数多くのメディアに取り上げられている話題の人物です。物心ついた時からITは身近だったという森さん。中学生の時には自分でPCを組み立てたり、地元岡山のラーメン店を紹介する自作サイトが話題になったりと「自分が作ったモノを周りが使ってくれるのが嬉しかった」という子ども時代を過ごします。大学進学にあたり、情報系に行くか、建築系に行くかを考えて、建築系の安全システム工学科に進学。「情報の授業も真剣に受け、授業のタイピング大会では1位を取ったこと」と明かします。バスケットボールサークル「アブレックス」に所属し、忙しい大学生活を送っていました。

高校生の時からファッション好きでもあった森さんは、在学中の2006年、国内外のファッションを紹介するブログメディアを立ち上げました。パリコレに乗り込み、カーン・ラガーフェルドなどの有名デザイナーに突撃インタビューするなどの独自の記事があっという間に人気になり、スポンサーも獲得。「起業家 森雄一郎」の原点です。

2009年3月に大学を卒業した後は東京のファッションイベントプロデュース企業を経

て、不動産ベンチャーでセールス・マーケティングに従事。世界中のファッションが集まる東京で、自分のサイズに合うスーツがなかなか見つからないというジレンマに直面します。「そんな時、友達にオーダースーツをすすめられて試したところ、自分にぴったりで、これこそ自分が一番欲しいサービス、自分が一番のユーザーになれると思ったことが、FABRIC TOKYOのスタートでした」。森さんは「FABRIC TOKYOは洋服を売るのではなく、洋服を通じてはたらく楽しさを提供する会社です。体にフィットするだけでなく、ライフスタイルにフィットする1着を届けています。」と話します。FABRIC TOKYOのスーツは、しわになりにくい素材を使ったり、着ていることを忘れるような着心地のものだったり、働く人のさまざまなシーンに寄り添うもの。体にほどよくフィットした着心地のいいスーツは、服よりも着る人自身の個性が際立ちます。

自分の好きなことを追求し、ビジネスを通して社会に新しい価値を提供している森さんは、いま、高校生や大学生に「自分の小さい頃の夢や大好きなことは、削ぎ落とさなくてもいい。自分の個性や得意なことを



生かすような生活をした方がいい」と語りかけます。「大学はいろんな場所から人が



集まり、いろんな学部、いろんな先生がいる場所です。人と出会って、興味があるものに貪欲に取り組んだほうが楽しい」。森さん自身、大学での人との出会いで自分の世界が大きく広がりました。「語学留学に行った友達の話聞いて、そんなのもアリなんだ!」と、学生時代に世界10か国以上を訪問。自分の見る風景が変わり、人の多様性に気づいたことが、FABRIC TOKYOの「もっと多様性のあるスーツを提案したい」「一人ひとりの個性を大切にしたい」という思いにつながったのだそうです。「心をオープンにして自分に問いかける。そうして見えてきたものに歯止めを効かせず、とにかくとことんやってみる」。そう語る森さんの言葉には、自由に自分らしく生きる強さと、爽快感が感じられました。

KAGAWA UNIVERSITY'S ALUMNI

心をオープンにして自分に問いかける。 自分の「好き」を、削ぎ落さない生き方。

株式会社FABRIC TOKYO 代表取締役社長 森雄一郎氏
<https://fabric-tokyo.com/>

Next Innovation.

香川大学発 研究シーズ活用レポート

Kagawa Univ. Case Study No.
KAGAWA UNIVERSITY
04



香川大学生が企画し、添乗員も務めるユニークな旅

香川での知られざる「体験」を学生が発掘 新しい旅のカタチが注目されています。

香川大学経済学部 学生プロジェクト またたび

「またたび」は、経済学部の学生プロジェクト。地元企業の新日本ツリスト株式会社と共同で、観光ツアーを企画しています。2014年に最初のツアーを実施し、今年の6月で27回を数えました。有名観光地ではなく、各々の地域が持つ知られざる「魅力の原石」を発掘。それらを組み合わせてバスツ



アーを企画します。今年2月に実施された「牡蠣&イノシシ堪能ツアー」は、「さぬき市の志度湾で養殖したカキを港で焼いて食べる⇒東かがわ市・水主の農園でレタスの収穫体験⇒東かがわ市・五名でのしし汁をメインにした昼食⇒同じ五名で草木染めのワークショップ」という内容。個人旅行では叶えられない体験が満載で、大好評でした。ツアーの企画は、時には半年以上も前からスタートします。ウェブなどで基本情報を得た後、現地に赴いて店やイベントなどのナマの情報を収集。協力してもらえ人脈も自ら築きます。ラフ案を設計したら、新日本ツリストの担当者の意見も参考に、協力してくれる方々と現地で話し合い、ブラッ

シュアップを続けます。ツアー内容が決定した後は、手描きのガイドブック、地図やメニュー表などを作成。当日は添乗し、自作の資料をもとにガイドを行います。体験の面白さに加え、これらの「おもてなし」と、参加者全員に積極的に話しかけ旅のパートナーとなる接し方に感激し、学生のファンになる方も多いのだそうです。



経済学部 西成典久教授
専門分野 地域振興・まちづくり

企業、参加者、地域、学生 どれも笑顔にするビジネス

「またたび」は経済学部の授業をきっかけに生まれました。県内企業が自社の抱える課題を発表し、経済学部の学生チームがその解決策を考えるという授業に新日本ツリストが参加していた縁から、「本当にビジネスをやりませんか」と声がかかりました。それに応え、授業の一環として、大串半島と引田を巡る観光ツアーを実施したところ、予想以上の集客と反響があったため、学生プロジェクトとして引き継がれたのです。

「企画と集客で地元企業に貢献し、参加者に喜んでいただけ、観光資源の発掘で地域活性も行える、『三方よし』のビジネスが『またたび』です。さらに、学生は社会と関わる経験も得られます」と、アドバイザーとして関わる経済学部の西成典久教授。学生たちも、「企画力、交渉力、コミュニケーション能力、組織管理能力が身についた」と口を揃えます。観光客の受け入れ地が、その地域の特性を生かした観光を実施する「着地型観光」が注目される今日、地元学生が生み出す観光ツアーは県内外から注目され、日本観光振興協会主催の産学連携ツーリズムセミナーin関西において、「学生による観光振興に関するアイデア・研究発表」で最優秀賞を受賞した実績もあります。今後は、インバウンドを対象にしたものも検討中。世界に向けても、ガイドブックには載っていない香川の魅力満載の旅を提案してくれそうです。



matatabi
Kagawa Univ. Tour Project for Revitalization of Local Community

《研究シーズ活用のご相談は》
香川大学 産学連携・知的財産センター

〒761-0396 香川県高松市林町2217-20
TEL.087-864-2522 FAX.087-864-2548

本学研究者の研究成果は、HPより確認できます。
<https://www.kagawa-u.ac.jp/ccip/>



嫉妬するほど(笑) 学生ガイドたちは人気。 観光業界の常識を打ち破る 発想に期待しています。

新日本ツリスト 近江明帆さん



着地型観光が話題になり、県内のコンテンツの強化を考えていた時期に、学生と企業のコラボというかたちで「またたび」を始められたことは、弊社にとって大きなメリットになっています。ツアーに協力していただく地域でも、参加して下さる方々にも、学生さんはとても人気で、時には嫉妬を感じるほど(笑)。コミュニケーションの触媒となってくれるので、企業単独よりも明らかに相手の反応が柔らかい。「応援したい」と思わせるひたむきさと愛嬌には、わたしも触発されています。ツアーの企画には、観光業界の常識を覆すような斬新なアイデアもあるので、できるだけそれを生かしつつ、プロからのアドバイスをします。ホスピタリティの意識が高く、ひとりで参加したお客様が孤立しないよう話しかけ、お土産に手書きのメッセージカードを添えるなど、至れり尽くせりのおもてなしを行ってくれるのですが、その情報や経験がデータとして保存され、担当者が代替わりしても引き継がれているのも素晴らしいと思います。学生時代からビジネスとして観光に携われるのは貴重な経験。卒業してからも、今のままの発想力と熱を持って、観光業界をリードしてください。



地元の方に教わった「こんびらふねふね」を踊って旅のフィナーレへ!

Hello!

インターナショナルオフィスです!

日本一小さい県、香川県にありながら、世界中の大学生と出会える香川大学。

「THE世界大学ランキング2018」でも、研究や教育とあわせて、本学の国際性が高く評価されています。

大学の国際化を強力にサポートしているのが、
私たち香川大学インターナショナルオフィスです。



南キャンパスの北東門を入ってすぐ右手がインターナショナルオフィスの入り口です。

オープンスペースはギャラリーのよう。今は「留学生から見た日本」の写真を展示しています。



誰でも座ってほっと一息つけるスペースも。おしゃべりがいつの間にか留学相談になったりもします。

イングリッシュカフェ@オリブスクエア2F

香川大学生が、グローバル時代に相応しい実践的な英語コミュニケーション能力を、楽しみながら身につけられるようにとオープンしたイングリッシュカフェ。毎週のように英語を使ったワークショップやイベントを開催しています。TOEFLやTOEICなど留学に必要な試験の勉強会なども行っています。

English Cafe



他にも「Travel English」「Study Abroad Skills」といったさまざまなワークショップを毎日開催しており、英語が得意でない学生を対象としたものもあります。ワークショップのスケジュールは毎週更新されます。フェイスブックやツイッターも日々更新しますので、要チェックです!



サイコロを転がして、話すトピックを決めているグループも。



毎週木曜日のランチタイムは「English Lunch Conversation」として英語でのフリートークを実施しています。多様な国籍の留学生と日本人学生が集い、会話を楽しんでいます。



Facebook



Twitter



グローバルに活躍できる
香川大生が増えています。



徳田雅明副学長
(国際戦略グローバル環境推進担当)

探検!

インターナショナル オフィス

@幸町南2号館1F

イングリッシュカフェからほど近く!新しくなったインターナショナルオフィスを、留学生センター長のロンリム教授が案内します。

インターナショナル
オフィスは
まだまだ進化
していきます!



学内にプレイルーム(お折り部屋)も設置しています。



オフィスのロビーは、留学生や海外に興味のある日本人学生のための情報収集の場です。学生から送られてくる留学中の様子や、留学に関する情報等を常に発信しています。



私たちが全力でサポートします。はじめての留学は不安がつきもの。どんな小さなことでも相談しにきてください!



注目!



インターナショナルオフィスでは
ニュースレター「ちきゅう見聞録」を発行中



取材日にはイングリッシュカフェで「イングリッシュランチ」が開催され、さまざまな国の学生や先生が会話を楽しんでいました。時には「ピタテカフェ」という名称で、留学した日本人学生が体験談を話す催しも。「体験談は聞くだけでも面白いし、勉強や就職のリアルな話を直接聞けるのが魅力です。インターナショナルオフィスでも奨学金や単位、就職などの疑問や相談にきめ細かく対応しています」。昨年度、香川大学から海外に飛び立った学生は約240人。「学生は言葉や文化が全く異なる中、問題を発見する力、それを解決する能力、コミュニケーション力、異文化理解力を身に付けて、大きく成長して帰ってきます」。グローバルな環境でも自分らしくやっつけていくという自信を得るには、3か月がひとつの目安となるのだそう。「海外留学のメリットが実感できる3か月以上の留学生を、もっと増やしたいと思っています。行くのなら専門教育が始まる前の1・2年次がおすすです」と徳田副学長。大学に入ったら海外へと思っあなたは、大学に入ったらまずインターナショナルオフィスへ充実した大学生活の第一歩となることは、間違いありません。



地域の未来に貢献する

香川大学支援基金

香川大学は、「香川大学支援基金」に、皆様からいただいた寄附を活用しています。本学は、地域の知の拠点、また、地域に根差した学生中心の大学として、教育、文化、医療、生涯学習や産業振興を通して地域のニーズに応え、質の高い人材の育成を行っています。希少糖をはじめ特色ある学術研究や学内の国際化などで、世界的にも認知が高まってまいりました。地域社会とともに豊かな未来を拓く基盤として「香川大学支援基金」を活用してまいります。

基金により取り組む事業

大学の集積した「知」を生かした

地域貢献の推進

大学の「知」を生かした、地域の文化振興、産業の活性化、希少糖などの特色ある研究による新たな地域イノベーションの創出、生涯学習の提供、健康づくり、地域の子どもの育成などに活用します。



21世紀の国際社会で活躍できる

グローバル人材の育成

グローバル化の進む地域社会の課題解決に貢献できる人材の育成を目指し、学生の海外留学や海外での学会発表、調査研究活動などの援助を行います。本学に受け入れている外国人留学生への支援や国際祭などの環境整備にも活用します。



経済的に困窮している学生への

修学支援奨学金事業

経済的な理由により修学に困難がある学生で、勉学意欲がある者に支給する奨学金として活用します。経済的に困窮している学生が勉学に集中できる環境をつくることができます。



ご寄附の方法が選べます!

■クレジットカードを利用した寄附のお申し込み

ご利用いただけるクレジットカードの種類は以下のとおりです。



■口座振替を利用した寄附のお申し込み

口座振替による継続的なご寄附(定期自動引き落とし)もお受けいたします。寄附回数は年1回(6月又は12月)、年2回(6月・12月)からお選びいただけます。

■香川大学支援基金寄附申込書の入手方法は…

大学ホームページから/香川大学支援基金寄附申込書(預金口座振替依頼書)をダウンロードしていただき、香川大学支援基金事務局(下記)まで郵送してください。郵送での申込書お申込み/上記の申込書をお送りいたします。はがきやメールに住所・氏名・電話番号をご記入の上、以下までご連絡ください。宛先やメールの件名、または、本文中に「香川大学支援基金寄附申込書」郵送希望と記載してください。

郵送先/〒760-8521 香川県高松市幸町1-1 香川大学支援基金事務局

■振込用紙を利用した寄附のお申し込み

振込用紙を利用した寄附を希望される方は、本号の振込用紙をご活用の上、お近くの金融機関の窓口からお振込みください。ゆうちょ銀行・郵便局又は百十四銀行・香川銀行から振込まれる場合は振込手数料はかかりません。その他の銀行などをご利用の場合は手数料のご負担をお願いいたします。

香川大学から感謝を込めて

ご支援者の方は税制上優遇措置が受けられます

■ご寄附いただいた方全員

ご了承を得て、ご芳名を大学ホームページ等に掲載し、未永く顕彰いたします。

■個人10万円以上、法人・団体 30万円以上寄附された方

感謝状と記念品の贈呈/学長より感謝状と記念品を贈呈いたします。銘板による顕彰/ご芳名の銘板を学内に掲示し、未永く顕彰いたします。

VOICE 私も応援しています!

高松市 N様(女性・73歳)

60歳の時から生涯学習センターに通い始めは十数年。現在、再び学ぶ楽しさを味わっています。そんなご縁もあって香川大学のホームページを見ていた時に「古本募金」のことで知り、家に眠っていた数千冊の本を提供したのが今回の支援のきっかけです。手間がかからないところが魅力でした。大学にはいろいろな学生さんがいらっしゃるとありますが、社会にもいろいろな方が必要です。勉強、スポーツ、その他の活動…それぞれの学生さんが大学生活の中で自分らしい道を見つけて、「自分はこれで行く」と、自分自身の力を信じて前に進んでいただきたいと、つねに思っています。たとえ一番になれなかったとしても、自分なりに懸命に花開こうとする。そんな若い方の姿はいとしく感じられます。今回の支援が、そんな学生の皆さんの、お役に立てたら幸いです。

奈良市 関博 様 (香川大学経済学部19期生)

昨年10月、又信会大阪支部の総会で、佐藤経済学部長より香川大学支援基金設立のお話を伺ったことがきっかけで、今回支援をさせていただきました。私は香大の皆さんに「好きな分野で能力が発揮できる」ことを大切にしていきたいと考えています。例えば、英語、簿記、会計など「自分はこれができます」と胸を張って言えるスキルを身に付けることが、これからの人生100年時代を生き抜くカギになります。人の寿命が会社の寿命よりもはるかに長くなる今後、自分に強みがあればどこでも活躍できます。本来、就職とは職に就くことであり、どんな仕事をするのが大切ですか。学生時代の4年間は「自分探しの旅」だと思います。そのために香川大学には、学生さんが自分を発見できる場になっていただきたいですね。香川大学には各界で活躍する卒業生が多い点を生かし、現役学生と実務経験の豊かな各業界の先輩との交流を図る場を増やすことを提案します。人生100年時代、学びのステージ、仕事のステージ、老後のステージが長くなっています。学生が抱く世の中に対する不安を、安心に変える大学として、この変革期を乗り越えて欲しいと願っています。

詳しい情報はHPで! <https://www.kagawa-u.ac.jp/kikin/about/>

速報

芝浦工業大学との交流事業

香川大学×芝浦工業大学

「地方と東京圏の大学生対流促進事業」に採択されました!

うまげなかがわ感じてみまい! うどん県住みます学生プロジェクト

香川大学と芝浦工業大学の学生が相互に交流する事業で、芝浦工業大学の学生は、香川大学で香川県や地域について学び、香川大学生と一緒に考えます。芝浦工業大学は、私立の理系大学としては全国で唯一、スーパーグローバル大学(全国37大学)に選出され国際教育研究に大きな成果をあげている大学です。香川大学の学生は、芝浦工業大学が東京で開催する「国際インターンシップ」や海外の各国で開催する短期及び長期のインターンシップ等に参加する予定です。

地方と東京圏の大学生対流促進事業

「まち・ひと・しごと創生総合戦略(2017改訂版)」で、「地方大学と東京圏の大学の単位互換等により学生が地方圏と東京圏を相互に対流・交流する取り組みを促進する」となったことに基づき、内閣府から「地方と東京圏の大学生対流促進事業」に取り組む大学に対して、補助金により支援を行うものです。

人材交流

香川大学

学びあい

芝浦工業大学 SHIBaura INSTITUTE OF TECHNOLOGY

芝浦工業大学の学生が香川大学にやってきます!

「地域を体験」をテーマに、地域課題を肌で感じることのできる香川大学での短期・長期プログラムの実施

プロジェクト内容

瀬戸内・香川を知るe-Learning科目の受講

香川県の自治体や地域コミュニティとの連携による「地域インターンシップ」への参加

香川大学生による地域貢献プロジェクトへの参加

担当教員より

それぞれの大学で習得する高度な専門知識を生かすためには、ローカル・グローバルを問わず多様な価値観を理解し、社会の抱える問題を解決できる実践力を養うことが重要です。日本国内でも、地域によって価値観は異なります。本プロジェクトへの参加を通じて、それぞれの価値観を理解し、実践できる能力が養われることを期待します。



香川大学 創造工学部 准教授 八重樫 人

これからの成果にご期待ください!